

10/24
福井

NEWS ユース 論点

社会部
堀
英彦



や教育費を犠牲にしてスマートフォンを持つ生徒もいる。無理して着飾ることもある。見た目で判断するのは困難だ。

あるシングルマザーは「福井は保守的な上に、幸福度日本一ばかりが強調され、窮状を訴えにくい」と話す。だからこそ、現場に根ざした報道で、社会に問うべきと考えるが、批判を恐れ取材を拒否するケースは確実に増えるだろう。

もう一つの懸念は、われわれ書き手側も尻込みすることだ。「ねつ造」と批判されるような取材テーマは避けたいという心理が働くことは否定できない。二つの懸念が的中すれば、貧困は社会の闇に埋もれていくことになる。

今回の批判の二因には、メディア側の責任があると感じる。新聞掲載の多くは匿名であり、われわれは人物が特定されないよう、書き方に細心の注意を払う。趣味など日常の「コマをあえて書かない」こともある。記者として当然の配慮だが、それで多様な貧困の姿を読者に伝えきれているか、市民理解の足かせになってはいないか、とこのシンレコマを常に抱えている。

子どもの貧困問題を扱ったNHKニュース（8月放送）に登場した女子高生に対し、インターネット上で「ねつ造だ」などと批判が相次いだ。漫画やイラストが趣味とみられる生徒の部屋の映像や、会員制交流サイト（SNS）の情報に基づき「趣味を我慢すれば進学できた」といった声も出た。貧困をテーマに取材している自分にとって、少なからず衝撃だった。

貧困には生死の境にあるような「絶対的貧困」と、年収約120万円に満たない「相対的貧困」がある。日本の問題は主に後者で、こつした世帯で暮らす子どもの割合は16・3%。ひとり親家庭では54・6%に上る（ともに2012年）。

今回の件で懸念されるのは、貧困の現状が今後表に出ていくことになることだ。子どもたちは家庭が貧しくても「他人と同じように振る舞いたい」という意識が強い。食事

貧困報道に相次ぐ批判 闇に埋もれる懸念強く